

第7章. 西欧近代主義の姿が浮かぶ

ぼくが生きてきた現代社会では、自分が到達し得た成果を公表して他者が活用できるようにすることは、ごく当り前のことでした。経済や産業などの実業の世界でも、政治の世界でも、学問の世界でも同じことが言えました。

これは、錬金術師たちが未だ横行していた時代にデカルトが色々と思ひ悩みながら考えたことの成果であり、後に続く人たちの努力の成果でもあったと言えます。即ち、西欧近代主義の一つの成果でもあったのです。

しかし、西欧近代主義が多くの成果を生み出していく過程で、それは少々異なった姿も見せるようになりました。その現代的表出の中では、成果の公表や伝承が当り前のこととして行われないことが実際には少なくないのです。

デカルトが方法序説の中で語っている公表や伝承についての考え方は、誰もがその通りだと理解を示します。しかし、競争環境が厳しい現代社会では、自分の業績や社会的評価の獲得のために、公表せずに自分の武器として抱え込もうという心理が働いてしまいます。現代人が自分の成果を公表しない場合の理由はこのようなもので、デカルトの理由とは全く異なるのです。

デカルトが公表と伝承に思ひ悩んだ理由を整理してみますと、

- ・ガリレイに対するローマ法王庁の裁判の結果
 - ・「力の及ぶ限り万人の一般的幸福を図るべし」という、当時の知識人にとっての掟
 - ・自分の成果の公表が誤解を招く可能性
 - ・自分が定めた原理の誤解に基づいて途方もない哲学が展開される可能性
 - ・誤解や未理解による質問に応じることによる時間のロス
- といったものになります。

こうしたことについて思ひ悩む中で、デカルトは多くのことを考え、多くの創造的結論に達したのです。その中には、現代にもそのまま適合し通用するものもありますし、後世の人たちの誤解から現代社会の諸悪を生み出すことになったものもあります。こうしたことに踏み込んでいこうと思います。

「力の及ぶ限り万人の一般的幸福を図るべし」という掟が、当時の知識階級の上層部に浸透していたとは驚きです。この掟に反しないようにしようとの想いがデカルトには重くのしかかっていた。その一方、旧教徒であるデカルトが敬服するローマ法王庁のガリレイに対する判決もまた、彼にとってはきわめて重いものでした。

この二つの重いものを背負いながらデカルトは、成果を公表するか否かの狭間で悩ん

なのです。色々なことに想いを馳せながら、彼の考えは公表する方に傾いていき、その方法を探ることへと向かったのです。その中心にあったのはデカルトの次のような確信でした。

- ・自分の提唱する実践的哲学は、自分たちを取り巻く全ての物体の力や作用を明らかにし、それらの物体をそれぞれ適切な用途に用いることを可能にする。そして更に、こうしたことが実現すれば、この実践的哲学が人間を、言わば自然の主人にして所有者たらしめることができる。

ここで“実践的哲学”と呼ぶものは、現代では“科学”と呼ばれるものに近いと受け止められます。

中心にあったこの考えが誤解を招く一つの要素になろうとは、旧教徒だったデカルトにとって思いもよらないことだったでしょう。デカルトがこの考えを打ち出した際に基盤にあったのは、大地の実りと地上のあらゆる便宜の享受、この世で最上の善である健康の維持、といったものです。そして、その手段を医学の中にこそ求めるべきだと主張していました。

誤解は経済活動に軸足を置いた新教徒たちに生まれたと言えます。自然の主人にして所有者となることは、新教徒たちにとってはデカルトの思いとは異なる意味を持つようになったのです。近代を通して現代に至るまで活動の基盤に置かれた考えは、新教徒たちの頭の中にある“自然の主人にして所有者となること”でした。

新教徒たちの頭の中にある“自然の主人にして所有者となること”と、“われ惟う、故にわれ在り”に対する誤解とが結び付き、新教徒たちの主導の下に、資本主義経済の展開と新世界への進出が行われ、近代から現代までの歴史が作られてきたのです。言い方を変えれば近代から現代への歴史は、新教徒たちがデカルトの哲学を曲解して突っ走った歴史だとも言えます。

人間が自然からの収奪者になることなど、デカルトは一切考えていなかったし、自分が開いた哲学が歴史の先頭を走ることになるとも考えていなかったと言ってよいでしょう。西欧近代主義の萌芽に貢献したデカルトの哲学は、歴史過程でこのように変質して近代社会を発展させたのでした。これが西欧近代主義社会の現実だと捉えることができます。

マックス・ヴェーバーは、自著「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の中で、「資本主義の精神」の形成に対して「プロテスタンティズムの倫理」が或る決定的な影響を与えたということを論証しています。それは決して、「プロテスタンティズムの倫理」と「資本主義の精神」とを同一視したり、「プロテスタンティズムの倫理」が何らかの営利を奨励することによって「資本主義の精神」の形成を助長

したなどと主張しているわけではありません。

史実の示すところでは、禁欲的プロテスタント諸派は一般にきわめて顕著な反営利的傾向を帯びており、実践においてもきわめて真摯な、徹底的な態度を取っていました。「プロテスタンティズムの倫理」と「資本主義の精神」とは反対物と言えるような態様を見せていたのです。こうした状態にあつて、「プロテスタンティズムの倫理」が反対物と見える「資本主義の精神」を生み落すことになった、その因果の関連を明らかにすることをヴェーバーは試みたのです。

ヴェーバーの論証していることの概要は、おおよそ次のようなものです。

禁欲的プロテスタンティズムが持つ激しい反営利的性格は、人類の歴史と同じくらい古い営利欲、そしてその営利欲に支えられた商業や金融業を、実践の上で有効に抑えることができていました。ところが他面においては、プロテスタンティズムの倫理（ヴェーバーの言葉で言えば、エートス）は、その固有な性格によって生産力の著しい向上をもたらし、その担い手たちを富裕にし、そこに思わざる結果として新たな形でより強力な営利心を芽生えさせ、成長させることになりました。

この過程がさらに進行し、その固有な倫理（エートス）は宗教的な装いを次第に脱ぎ捨て、新しい営利心と内面的に深く結合するようになったのです。こうして生まれてきたものこそが「資本主義の精神」に他ならないという訳です。このようにして「プロテスタンティズムの倫理」はその固有なエートスを遺産として残すことによって、「資本主義の精神」の形成に決定的な役割を果たしたのです。

「プロテスタンティズムの倫理」の担い手であるプロテスタントの信徒（特にいわゆるピューリタン）たちは、もちろん主観的には、営利をそれ自体として尊重することは決してありませんでした。しかし、その固有なエートスは、客観的には、全く意図していなかった結果として「資本主義の精神」を産み落とすことになったのです。

以上がヴェーバーの論証の概要です。ヴェーバーの論証からは、新教徒たちがデカルトの哲学を誤解、あるいは曲解したのではなく、新教徒の倫理観を通して、全く意図していなかった必然的結果として、西欧近代主義文明の発展が生まれた、と受け止めることができます。これも、西欧近代主義を考察する上で、たいへん重要なものと言えます。

西欧近代主義社会の現実を注視しますと、見えてくるものがもう一つあります。それは、西欧近代主義社会を成り立たせている基盤の一つは“武力”だということです。この命題を論証する根拠を二つ紹介します。

（1）西欧近代主義的に解釈される歴史：文明の発展段階説

(2) 西欧近代主義の華 “言論の自由” と武力の関係

西欧近代主義の精神は何によって文明の発展段階を区別したのか、即ち、どのような状態にある文明の発展段階を高いとしたのか、あるいは低いとしたのか、を考えてみます。その答は西欧近代主義的に解釈される歴史そのものの中に現れています。

それは、征服者あるいは支配者の持つ文明を発展段階が高いとし、被征服者あるいは被支配者の持つ文明を発展段階が低いとしたことです。西欧近代主義の発展の原動力の一つが植民地支配に在ったことを思い起せば、このことが容易に思い当たります。

征服と被征服、支配と被支配との関係を決めたのは武力でした。従来の固定観念的な物の見方を逆転させてみますと、文明の発展度が低いから武力が弱小で被征服者となったのではなく、武力が小さかったがために征服されてしまった人類社会の文明を、発展度が低いと決めつけたと考えることができます。

西欧近代主義の精神は、武力という物差で文明の発展度を測ったのです。西欧近代主義の特徴はここに顕著に現れていると言えます。

東洋の中国の歴史にはこのような特徴は見当たりません。武力による征服者の文明は必ずしも発展度が高いとは受け止められていなかったのです。また、古代ヨーロッパでも武力征服者の文明は必ずしも発展度が高いとは見られていませんでした。武力を尺度にした文明の発展度という概念を軸とする歴史観は、西欧近代主義そのものだと言えます。

この歴史観に関しては、現象学の流れを汲む哲学者サルトルと、構造主義の文化人類学者レヴィ＝ストロースとの間の有名な論争があります。この歴史観を養護する論陣を張ったのはサルトルで、これに疑問を呈したのはレヴィ＝ストロースでした。

現代の地球上の諸国を見回してみる時、現代は未だ西欧近代主義の強い影響下にあることを痛感させられます。国際社会のリーダーにあっては相変わらず最強の武力が必要とされているからです。

言論の自由は西欧近代主義の華と言えます。この言論の自由もまた、同じように武力に裏打ちされていると解釈することができます。

現代の世界を見渡してみますと、政治状況、社会状況が安定している国ほど言論の自由が広く認められていると言えます。政治状況、社会状況が安定しているとは、直言すれば国が安定しているということであり、国が安定しているとは国家の主権が転覆されにくいということです。

歴史の示すところでは、国家の主権を転覆する最終の手段は武力です。フランス革命、アメリカ合衆国独立、ロシア革命、中国革命、ベトナム戦争など、世界の歴史の前面に現れるものから、小さなものではフィリピンのマルコスからアキノへの政権移動のようなものまで、いくらでも例を挙げることができます。

一方、国家主権の転覆に対する耐性を保証するものも武力なのです。強大な武力を手に行っている主権国家は少々のことでは揺らぐことはありません。国民の1人ひとりが何を言おうとも、国家主権の転覆に至る可能性が無い限り放置しておいてもよいのです。ここに言論の自由の基盤があると言えます。

主権国家が強大な武力を掌握できる拠り所は、国民的コンセンサスです。即ち、国家機構がそのような武力をいつでも行使し得る状態で保有することを、国民が認めるということです。

それは国家主権の在り方を国民が受け容れるということに他なりません。このようなコンセンサスが培われる基盤は、ある国では民主主義であり、またある国では思想やイデオロギーであり、また別の国では民族の誇りや宗教ですが、西欧近代主義のもとでは国民主権がうたわれることが前提となっています。

国民主権のもとに建国されている主権国家で、国民的コンセンサスを得て国家機構が強大な武力を手に行っている場合に、言論の自由は存在します。言論の自由は武力を背景とした、まさに西欧近代主義の体現なのです。

西欧近代主義の下に存在していたにもかかわらず、言論の自由が制限された国がありました。一連の社会主義国家群です。これらの国々は強力な軍隊を持ち、強大な武力を手にし、体制が安定しているように見えたが、そうではなかったのです。

これらの国々に欠けていたものは国民的コンセンサスでした。国民が広く知見を得ることになれば、当時の国家主権の在り方を国民が受け入れなくなり、国家主権の転覆があり得ることを権力者たちは感じ取っていたのです。

このような権力者たちにとって、言論の自由は認められないことでした。見かけは強大だが、国民的コンセンサスを背景に持たない武力は弱いもので、結局はベルリンの壁の崩壊以降の世界が展開することになったのでした。

方法序説の末尾でデカルトが語っていることから想像しますと、彼は武力の拡大や軍事技術の研究を避けていましたから、自分の哲学が西欧近代主義者たちに利用される危惧を既に感じていたのかもしれませんが。

デカルトが自分の実践的哲学の意義を語った時、健康の維持を語った時、そして

その手段を医学に求めた時、彼の思考の中にあつたのは人間固体としての人間社会でした。進化の過程を踏む人類という考えは未だ無かつたと言えます。

それは、“健康の維持”という表現を使い、“人類の持続的生存”としていないところに現れています。ヘーゲルの登場で歴史観が重みを持つようになったのは150年ほど先のことで、ダーウィンの「種の起源」が登場したのも200年ほど先のことでしたから、こうしたことは歴史過程の必然だつたと言えます。

理性的にガリレイの考えに同調していたほどのデカルトでしたから、もしダーウィンが同時代人でしたら、適者生存の考えにも同調して“健康の維持”を超えて“人類の持続的生存”という考えを持つことができたでしょう。

もしそうなつた場合に何が起きていたかを想像してみますと、色々とイメージが膨らみます。デカルトの哲学は、大地の実りと地上のあらゆる便宜の享受、この世で最上の善である人類の持続的生存、といったことを基盤にして語られていたかもしれません。

そのような想像の先に浮かんでくるのは、デカルトが自分が自分である理由として到達した命題は“われ惟う、故にわれ在り”ではなかつたかもしれないということです。

人類の持続的生存を考える時、ダーウィンの適者生存の考えを欠くことができません。そして、環境変化という前提の下にダーウィンの進化論を発展させた吉村仁氏の“新しい進化論”で語られている“協調・共生者生存”にまで考察が及ぶ可能性も無かつたとは言えないでしょう。

西欧近代主義の時代精神の下で、資本主義経済の展開と新世界への進出に邁進した結果と言える現代では、協調・共生者生存の考え方は主流になりつつあります。こうした状況で考えられる自分が自分である理由としての命題は“われ交感し、そして惟う、故にわれ在り”になるでしょう。こうした命題に沿つた行動は、デカルトの著書に記録されている彼自身の思考の仕方や行動からも読み取ることができます。

デカルトは実験をたいへん重要視していました。その理由は、彼の中心的考えの中に「結果を先に見て、そこから原因に向かうのがよい」というものがあり、これを実践するための有力な手段として実験を位置付けていたことです。

これは、結果を見て何故そうなるのかについての仮説を立て、実験を通じてその仮説が妥当であるか否かを検証する、という考えであり、現代の方法論でも主要な位置を占める「仮説-検証」思考の原型だと言えます。

デカルトの基本的な考えは、特殊な結果は彼の見出した原理から演繹できるというものです。しかし、演繹するのに多数のやり方のうちのどれに依存しているのかを見出すことが困難なことも認めており、この困難を克服するための手段として実験を位置付けたのです。

演繹を軸に据えたデカルトが、演繹の起点となる原理の発見に「仮説-検証」思考を支える実験の力を高く評価していたことには大きな意味があります。実験とは、主体が働きかけることと、主体が感じ取ることから成り立ちます。デカルトはこれを高く評価したのです。即ち、“われ交感す”を評価し、自分もそれに沿って行動したのです。

知識が豊富になればなるほどより多くの仮説が生まれ、より多くの実験が必要になります。そうなりますと、それらの実験を全部自分で行うのは不可能です。こうしたこともデカルトは認識していました。こうした実験を適切に進めるためにはどうしたらよいかを考える中で、彼は伝承の価値を認めていったのです。

彼が伝承を目的として公表したのが、後に三試論として知られる「屈折光学」「気象学」「幾何学」の三つでした。そしてその中で、彼自身が画期的な事柄と呼んで展開しているのが、デカルト流の「仮説-検証」思考だったのです。

デカルトに伝承の重要さを気付かせたのが、人生の短さと実験の不足だったというのも興味をそそりますが、彼が目指すものが学問の探究であり真理の開明であって、自分の功績を世に問うことではなかったということから、十分に納得できることです。

方法序説とともに前進し、ここまで来ると聞こえてくるものがあります。それは、西欧近代主義を発展に導いたものは何か、限界として立ちはだかる壁とは何か、この壁を超えるための思考と行動の在り方とはどのようなものか、という問いかけです。

この問いかけへの答は、これまでにたどってきた中に見つけることができそうです。この答を探りながら次の章に入っていくことにします。